

**意見交換の概要**  
**(平成 28 年 6 月 29 日(水)・砥部町文化会館)**

**1. 小規模事業者に対する支援について**

商工会青年部は自営業者、若手経営者の集まりで、45 歳以下の者が集まって、今現在砥部町では今 31 名、県下では約 500 名程が組織に属してそれぞれの作業を頑張っている。また、地域のお祭り、消防団、PTA など、地域の活動にとってなくてはならない存在でありたいと思って活動している。どんな場所でも職を生み出す力、雇用をつくる力を持っていると思う。過疎地域でも仕事ができるし、知事の言う県の経済にとってなくてはならない存在になれるポテンシャルを持っている。そういった中、小規模企業ということもあり、リスク、将来に対する不安なども抱えながら仕事をしている。私たちのような小規模商工事業者に対し、県からのバックアップや将来的な展望、後押しなど、働きやすい、安心して働ける環境をつくれるような考えがあればお聞かせいただきたい。

**【知事】**

一口に中小企業と言っても業種や職種によって対応策が大きく変わってくるんですが、基本的に特に愛媛県の場合は、中予は 9 割以上が中小企業ですから、非常に大事なんですね。ただ、共通して対応するものとするれば、いざというときの資金繰り支援になります。例えば株価がドーンと下がった、円高が進んだとか急速に世の中の景況感が悪化したときなんかは非常に苦しい状況になる可能性があるんで、そういうときの利子補給制度とか、これは今どんどん増やしているところでございます。こういったものはいざというときは大いに活用していただきたいと思っておりますし、また新たな取り組みをするとき、近代化に向けての設備投資等々が発生したときも、それぞれ業種ごとに資金供給制度というのがありますので、意外と多いんですよ。結構知らないままに済んでいることもあるので、恐らく商工会なんかではメニューが揃っているはずだと思いますので、こういったものは行政の後押しとして活用していただきたいと思っております。

それから今、突出して何かやりたいという人が出てきた場合、さっき言った「スゴ技データベース」とか「すごモノデータベース」などをつくりました。これはブラッシュアップして外に出してもいけると、でも販売する力がない、サービスの力がないという場合にチャレンジをしていただきます。審査会でそれが上位に上ったとすると、「スゴ技データベース」とか「すごモノデータベース」に掲載されます。掲載されると県の営業本部職員が全国、世界を飛び回るときに、勝手に営業をします。そのときに商談会の可能性が生まれることもあります。

もう 1 つは、金融機関と信用保証協会と話し合いまして、この「スゴ技データベース」や「すご味データベース」に載ったところに対しては別途融資枠をつけていただくことにいたしました。これは今かなり活用者が増えていまして、100 社以上がご利用いただいているのかな、たかだかまだ 2 年しかたっていないんですけど非常に多くの方々に活用していただくようになっています。これも中小企業支援と言ってもいいんじゃないかなと思います。

それから商工会は分からないんですけど、例えば建設だったら建材の活用とかいろんな現実的な補助策があると思うんですけど、これも例えば環境配慮型の材料を使ったり、愛媛県の木材、県産材を活用した場合に別途助成制度を設けて、県のものを利用していただけたらバックアップできますよという体制も整えているところなので、業種ごとにいろんな制度がありますから、既にあるものは活用していただきたいと思います。また、業種によってはさっき研究所の名前をずらずら言いましたけれども、これは活用できるんですよ。「自分はこういうものをやってみたい」、「こういうものを開発してみたい」というときに、技術的なアプローチが必要であれば、県の研究所が一緒になって考えてくれますので、こういったことはフルに活用されたいのか

などと思います。

## 2. 砥部焼の観光施策について

砥部焼女性作家グループ「とべりて」の活動はやっと4年目に入った。今まではみきやんのビンバッチ、この夏からはダークみきやんのビンバッチを発売するなど、新しい砥部焼を提案することでPRになったが、それと並行して砥部町に観光客があふれて活性化するお手伝いができないかということをお話し合っている。その1つとして先日JR四国の「伊予灘ものがたり」でお客様に砥部町に来てもらい、砥部焼の絵付けを指導し、窯元に行って見学してもらって散策し、一緒に「伊予灘ものがたり」に乗るという体験型のおもてなしをした。非常に喜んでいただき、ただ単にもの売るだけでなく、こういうやり方で観光客の方を呼べるのではないかというヒントをもらった。ただ、道後やしまなみはたくさんの観光客や外国の方が来るが、その方たちを砥部町の方に呼ぶ手だてが考え付かない。例えば、通訳ができてガイド込みで窯元に来てもらえばいろいろ案内できるが、そういう取り組み方を教えていただけたら私どもの活動に反映できるのではないかと考えている。

### 【知事】

全国焼き物というのはいろんな地域にもあるんですけども、その中で砥部焼はどういうキャラクターなのかということのをしっかりと共有しておく必要があるのかなと感じてきました。僕の考える砥部焼というのは、伝統があって、しかも手づくりで丁寧なでき栄えで、かつ飾るものではない。活用するものである。しかも伊万里とかあいつた高くて手が届かないような値段ではなく、手の届く高級感、このあたりが砥部焼。飾るのではなく活用して高級感のあるもの、しかも個性的なもの、伝統的なものを活用することに喜びがあるところが砥部焼のキャラクターなのかと思っていました。そういう中で、伝統的な砥部焼、これもしっかりと継承していかないといけないんですけども、4年前に女性の皆さんと会ったときに、女性がもっと前に出て、多少文句を言われても前に出てPRしたほうがいいよ、というような話をした覚えがあるんですが、本当にとべりてが結成されて、活躍しているということが結構砥部焼全体のPRにつながっていると思います。かつまた、無理を聞いていただいて、最初はハンドベルを砥部焼でつくって、やっぱりやっている人たちがそれをイベントごとに演奏するというぐらいのことをやったほうがいいと言ったら、ハンドベルが難しかったんですね。

### (参加者)

そうです。つくるのが難しかったのでたたくほうに。

### 【知事】

たたくほうに、あれで十分ですが、何曲かレパートリーは。

### (参加者)

そうです。増えました。

### 【知事】

どんどん演奏してください。そういうのがすごく大事で、イメージがいいですから。例えば東京なんかでイベントやるときはそういう女性の方々が砥部焼のフェアのときに数曲演奏するだけで雰囲気が変わりますから、ぜひそういったものも大いにやっていただきたいなと思います。

それから「伊予灘ものがたり」、非常に好調で、特にあの路線というのは双海の日本で最も海と駅が近い場所ということも売りになりますし、また夕日がきれいな海ですからその風景も人を惹き付けるコンテンツになっていると思います。そこに食と砥部焼のお皿や家具が使われるというふうなふるさと自慢のてんこ盛りみたいな路線が人気を博して、現在でも予約率が8割、9割になっていまして、全国にある同じようなものがたり路線で人気ナンバーワンぐらいにいるはず

なんです。これは大いにこれからもコラボしたらいいんじゃないかなと思います。

それからさっき申し上げたサイクリングとのコラボというのも1つ考えられるのかなと。例えば去年砥部を走らせていただきましたけれども、砥部を中心としたサイクリングイベントと砥部焼を絡ませるような商品と言ったらいいのかな、コースですよ。例えば朝来ました、砥部焼で各窯元を動いて絵付けをした、窯に入れてその間にサイクリングに出ていく、サイクリングを終えて帰ってくるとでき上がっているとか、こういうようなことがあってもいいのではないかなと思いますし、それは他のサイクリングコースには絶対にはない1つの魅力になる「マイカップ付きサイクリング」、そんな感じでやるのも1つの芸だなと思います。

それから外国人の場合は、やっぱり旅行会社の商品にどう組み込むかがポイントになると思います。ヨーロッパの人が絶対に食いつくだろうなと思ったのが、松山市長時代に姉妹都市にドイツのフライブルグというところがあって、フライブルグの方は松山市に来られたときに砥部焼の絵付け体験に結構行ってもらっているんですが、皆がファンになるんです。特に前の前のベーメさんという市長さんは砥部焼おたくになってしまって、フライブルグの自宅に行くと壁一面、扉一面に飾られているんですよ。ティカップも全部砥部焼。それを皆に見せびらかしているような方なんですけれども、やっぱり使うということの楽しさがあるんだとおっしゃっていました。まさにさっきの立ち位置、それから飾って鑑賞しているんじゃないかと使っていらっしゃったのが非常に印象的でした。しかもマイカップ等々もあるもんですから、うまくはまれば面白いお客さんに結びつくのかなと思っています。そこで、旅行会社に、例えば松山ツアーの中に砥部焼体験、今治のしまなみサイクリングとのコラボレーションとか、そういったものをどう組み込んでいくかがポイントになってくると思うので、それはまた県のほうにもご相談いただけたらと思います。

もう1つは、これは前にお話したんですけれども、愛媛県全部を走ってみると、例えば新居浜市の銅板でレリーフ、四国中央市の水引き細工、菊間の瓦、今治のタオル、砥部焼、桜井漆器、大洲の和紙、野村のシルク、宇和島の真珠、伝統工芸品が点在しているんですね。ほとんど今までそれぞれでやっていたので、前に今治タオルとのコラボをやったと思いますけれども、こうしたいいものとのコラボレーションが思わぬ付加価値を生むことがあると思います。県内のそうした方々との対話、コラボレーションというのを想定した研究とかをどんどんやられたほうがいいんじゃないかなと思います。

### 《補足説明》〔中予地方局〕

中予地方局では、28年度から地方局予算で「在住外国人活用観光まちづくりモデル事業」を実施しており、観光まちづくりに外国人目線を取り入れたい観光まちづくり団体を公募し、在住外国人に各種メニューを体験してもらうことにより改善点などの意見をもらい、それを外国人観光客の誘客につなげているところですが、この事業を砥部焼を生かした観光まちづくり団体に周知し、ご検討いただくようお願いしました。

### 3. 道前・道後のイベント交流等について

私は定年後集落営農というものを立ち上げ、新規就農者を3人確保した。今回の地域創生事業にも今取り組んで協力隊を受け入れているところである。平成25年から毎年、農地治山事業でふるさとづくりのワークショップをしているが、我々60代の間でも地域を知らないということがある。地域の課題・問題点に長期的、中期的、短期的に地域でどう取り組んでいくかについてはいろいろな意見がある。我々の地域は高縄山山系と石鎚山山系のちょうど谷間にあたり、東予・中予を結ぶサイクリングロードをそこにつくったらどうかという意見も出ている。過疎地の農家の人たちが自信を失っており、集落営農の立ち上げにしても6年、7年かかるが、お年寄りが竹細工に取り組んでみよう、老人クラブで県道沿いに花を植えてみようとか、

やっと始まったところである。道前の文化と道後の文化とはちょっと違うものがある。これを融合させるということが今後愛媛県にとって非常に大事になってくるのではないか。西条の分水の問題にしても道前・道後が一緒にならないとなかなか難しい。道前・道後を通じたイベントなどをやってみてはどうか。

## 【知事】

最初に地域の財産という話をしたんですけども、語る人がいなくなったら瞬く間に忘れられてしまうらしいですね。これも松山市長時代だったんですけども、松山市の中ほどに桑原地区というのがあって、桑原中学校の後ろに270mくらいの山があります。淡路ヶ峠という名前が付いているんですね。これは桑原中学校の校歌に出てくるんです。どういう経緯があるのか聞いたら誰も知らないんですね。あるとき89歳くらいのおじいちゃんに、落選中で戸別訪問していたんですが、軒先でおじいちゃんと話していたら、「わしは知っとるで」という人に初めて出会って、滔々と歴史を教えてもらったんですよ。当時中予地域というのは北条から興った伊予水軍の河野家が治めていたんですけども、最後の通直という当主のもとに林淡路守という家来がいたんですね。外敵から河野平野を守るために砦を造ったんです。その砦が造られた場所が桑原中学校の後ろの山の上だったんです。その林淡路守が守っていたんで、その淡路守の淡路を取って淡路ヶ峠という名前になったんですね。小早川軍が攻め込んで来て、豊臣が政権を取って河野家は負けてしまうんです。通直はじめとして敗走するんです。家来の淡路守の船に乗り込んで瀬戸内海を渡って岡山のほうに行っちゃう。岡山に行って、そこに着いてからは皆ばらばらになっちゃうんです。林淡路守は船に乗って逃げて、岡山に行って、そこから放浪の旅をして、最後は山口県に行ったんです。山口県に土着する。山口県に土着をして300年の月日が流れるんですね。この林淡路守の10何代目かの子どもに林利助という子どもが生まれるんです。この子どもは非常に優秀な子で、将来を囑望されてあるところから養子にくれと言われて養子になってしまうんです。林姓から伊藤姓に変わるわけです。この伊藤姓に変わった伊藤利助少年が後に日本の初代内閣総理大臣になる伊藤博文なんです。伊藤博文公の先祖というのは愛媛なんですよ。伊藤博文公が亡くなる年の春先に実は道後温泉に来ているんです。それは先祖のお墓参りに来ているのと、来年自分のルーツである林淡路守が没後300年を迎えるので慰霊祭をやるんだということを言い残されて帰って、その年の秋にハルピンに行って倒されているんですけど、そういう歴史を地元の人には誰も知らないんです。その話をおじいちゃんに聞いたのでそこら中に話して、桑原の集会でも「皆さん、何でこんなことを知らないんだ！」とがががやったら、どんどん広がって、淡路ヶ峠を皆の力で整備しようとか、ふるさとづくりにつながっていくんですね。ふるさとの価値ってすごいなとつくづく感じたので、絶対皆さんのそれぞれの地域には何かが眠っているはずだと思います。

それからお年寄りが元気がないということを言われたんですけども、これは異質なデータだと思うんですけども、長野県に小川の庄というところがあるんですね。僕の父親は松山なんですけど、母親が長野の出身なんですね。長野というと名物の食べ物に「おやき」があります。その小川の庄というところは「おやき」をつくっている場所なんです。町の第三セクターがつくって会社になったんですけども、従業員の平均年齢は優に65歳は超えています。とても不便な村なんですよ。山の中にあって、そこでちょっと大型の公民館があって、そこに80歳とか90歳のおじいちゃんがいろりに2人座って「おやき」を焼いているんです。村の厨房では70歳から80歳のおばあちゃんたちがおやきの詰め作業をやっているんです。さらに営業部隊がいて、75歳ぐらいの方が営業部隊で海外まで行っているんです。今、利益をぼんぼん出しているんですよ。不便でありながら県外から若い人がじゃんじゃん来ている。とても70代、80代に見えなかったです。そういう場所もあるので、いい刺激にされたらいいなと最近こんな話をよくするんですけども、捨てたもん

じゃないなあと思いました。

道前・道後の文化が違うというのは本当に僕もそう感じる時があります。極端な話なんですけれども、僕はこういう仕事をやっているの、道前・道後というより東・中・南予という見方をしているんですが、同じ言葉をかけても南予に行ったときの反応と中予に行ったときの反応と東予に行ったときの反応と全然違うんですよ。東予に行くと、僕はこういう仕事をしていますから、「今度こういうことをやります。よろしくお願いします」って言うと、「あなたがもし選ばれたらどんな地域にプラスがあるか、どんなマイナスか」、「それが自分たちにどう跳ね返ってくるか」、それを聞いた上でやるかやらないかをはっきりする。言葉は良くないですけど、利というものを基準としてイエス・ノーを結構はっきり言ってくれるのが東予の気質だと思ったんですね。南予に行くと全然違うんです。同じ話で「今度こういうことをやります。よろしくお願いします」と。すると「うちは3代前の知事さんのときの誰と誰とのつながりがあって、あそこに世話になったけん、そういう絡みがあるから応援してあげるわい」、「こういう絡みがあるからあんたは応援できんわい」と。利ではなくて情というものを基準としてイエス・ノーをはっきり言うのが南予の特質なんです。中予は東温市や久万高原や砥部はちょっと違うんですけど、僕は松山ですから、松山は完全に商売のまちです。同じようなことを言っても、名前を言う前から「分かっていますよ。頑張ってください。応援してますよ」って。まだ名前も言っていないじゃないかというところで、商売やっていますからあまりイエス・ノーをはっきり言わない。こういう気質は同じ愛媛県でも違うかなと感じたことがあるので、逆にそれを融合させると面白いものができるというのは間違いないですね。

そこで松山市長時代に考えたのは、神輿の集結だったんです。今、ようやく定着しましたけれども、これは松山市長さんのときの最後の仕事だったんですが、松山は合併合併で大きくなっているので面倒だったんですけども、いろんな神輿を一堂に会したイベントをやろうということで、秋の神輿総練りというイベントを立ち上げたんです。ここに南予あるいは東予、例えば牛鬼が来る、西条のだんじりが来る、新居浜の太鼓台が来る、この日だけは愛媛中の文化の違いを越えた総結集をするということをやったら、いい友好コラボが生まれるなどずっと言っていたのですが、ようやく去年、牛鬼は最初から参加してたんですけど、途中から新居浜の太鼓台が出てきてくれて、ようやく去年だんじりが出て来て、全部そろったんですね。これは圧巻です。違いがあればこそ連携したときに面白さが生まれるというのは間違いないと思います。ぜひ今の観点は何か考えていただけたらなと思います。

#### 《補足説明》〔中予地方局〕

28年8月に、道前側（西条市丹原町中川）、道後側（東温市川内町奥松瀬川）両地区の公民館長など、住民代表者による交流に向けた顔合わせ会を実施した結果、次のような交流が芽生え始めたところです。

- ①道前側住民の仲立ちによる、道後側住民のサイクリング先進地視察（シクロツーリズムしまなみ）。
- ②「自然再生観察」をテーマに大三島住民グループとの交流。
- ③道前側住民を講師に「自然再生観察や地域再生」をテーマとした、道後側住民対象のワークショップの実施。

#### 4. 農業の基盤整備等について

JA えひめ中央は砥部町の中で3つ支部があるが、一番山間部にあるところは昔は貯蔵みかんで有名な産地で、みかんが暴落した際ハウスみかんを導入し活路を見出した。10年くらい前に重油価格の高騰でハウスみかんが減り、大変苦しい思いをしていたところ、県が紅まどんなど

いう新しい品種を開発し、ここは紅まどんなを産地化しようとして力を入れた。そのおかげでえひめ中央での売上げの2割が砥部支部でつくられるようになった。解禁日には半分以上の紅まどんなが砥部支部から出荷されており、本当に県には感謝している。また、施設についても県及び砥部町からから援助いただきお礼申し上げたい。そのことが縁で、若い人が紅まどんなをつくろう、退職後に農業をしようという人が少しずつ増えてきた。しかしながら現状は、高齢化、担い手不足で耕作放棄地が増え、増えた耕作放棄地で病害虫が増えたり、鳥獣による農作物の被害が大変多くなっている。砥部支部には県の銚子ダムがあり、その地権者もだんだん減ってきているが、地権者が持っている耕作放棄地を平坦になる地形に基盤整備していただきたい。そうすればその代が終わっても新規に入ってきてやすい農業、未来につながる農作地になるのではないかと思っている。砥部町にお願いしているが、県でも基盤整備をお願いしたい。

## < 5 の後に合わせて回答 >

### 5. 耕作放棄地の活用について

砥部町広田地区はとても自然豊かで高原野菜、キャベツやホーレン草、しいたけ、自然薯、トマトなどたくさんの特産物がある。松山から国道 370 号線のトンネルを越えて左に入っていけば春、夏はキャベツ畑の広がるとてもきれいな景観のいいところがあり、ぜひ足を運んで多くの方に見てもらいたい。しかし、少し離れると限界集落も多く、畑や田んぼの荒れ地ばかりである。広田地区に限らず高齢化が進んで農地が農地として使われていないところが多い。平野部ではこの間まで畑だったところがいつの間にか宅地になっていたりするところもよく見かけるが、山間部などは補助を受けて農業振興地域に指定されているところも多く、簡単に売買できずに放置された状態になるところも多い。我が家も去年マイホームを考えていたが、主人の実家は裏が山で湿気も多くて少しでも快適に住める場所をと安易に主人の父や祖母が持っている今は使っていない農地を提供したらいいかと思ったがうまくいかなかった。放置され、どんどん増えている荒れ地をどう活用すればいいのかお聞かせいただきたい。

#### 【知事】

農業全般にわたる話なんですけど、柑橘については先ほど申し上げましたとおり、みかん研究所の職員が頑張っていると思います。ほかの研究所もそうなんですけれども、米の新品種もこれからさらに上のものがもう少しで完成するという報告も受けていますし、この前も「並以上のものはできないので」と言ったら、「いや、何とか考えます」と言っていましたから、僕は並以上のものは無理だと思っているんですけど、「必ずつくって見せます」とか言っていましたので、飽くなき探求心に満ち溢れているなという感じを持っています。

静岡との比較があるんですけども、静岡の場合急傾斜地が少ないんですよ。意外と平地にばあっと耕地を整備するというケースが多いので。ただ味の面では傾斜地のほうがいいということもあります。中晩柑などは別なんですけども、逆に言えば和歌山にしたって静岡にしたって、中晩柑まで伸びてこない、背景が違うので。そういう弱点を収益が上がる品種でカバーすることに力を入れてきたのが愛媛県のこれまでのやり方だったんだなということも分かりますので、特に全体を見ていくと急傾斜地が多いのでなかなか集約が進まなかったというのは事実だと思います。ただ、その中で今 40 数品種の柑橘が提供できるようになりました。それまでは品種の多さこそがパワーになるということにあまり農協も気付いてなかった。多品種こそこれからは有効なんだと、周年供給体制こそが強みになるんだということを前面に出そうということをやってきたんですけど、最近非常にその傾向が強くなってきましたので、静岡産と愛媛産、温州みかんだけで比較しても、今年も去年も一昨年も静岡産、和歌山産よりは愛媛産が1割ちよっ

と値段が高いという市場評価につながっているということでございます。もちろん、有効品種の切り替えについては、砥部町も含めて市町等に協力しながら、設備の投入についてはバックアップして収入を上げていくということを今後ともやっていきたいと思っています。

ただ若い人、担い手が不足している課題なんですけれども、そもそも僕は非常に疑問を感じていたんですが、農業をやっている関係者の皆さんというのは厳しいということ声を大にして言うんですよ。でも収益が上がっているときは誰も口を開かないんですね。若い人たちには「うちはいいよ」と、「収益が上がっているよ」という声が全く聞こえてこない。「厳しい」、「大変辛い」ということばかりが聞こえてくるので、「農業って大変そうで、もうかりそうもないし、夢がないな」というふうに勝手に思っちゃっているところがあるんですよ。農業関係者の会に行くと、「この中で収益が上がっている人はもうけているって言ってくれ」と。若い人たちに「業として成り立っているじゃないか」、「やり方によってはやれるんだ」というメッセージが必要なんですね。そういうことを言い続けています。さらにそれを大々的に発信するために、そういう声を大々的に外に出してもいいという人に手を挙げてくれということで、今40数人手を挙げてくれました。そのデータベースをつくって配っているんですけど、「えひめ愛顔の農林水産人ガイドブック」というもので、自分たちがこんなにやりがいがあって、こんなにうまくいっているんだということ、要は農業に関心を持ってもらうためのツールなんですよ。この人たちは学校の授業にも時折参加していただきます。農業学校とか水産学校とかそういうところで、1次産業に誇りを持ってこういうふうに行っているということをどんどん伝えてくれる。そうすれば若い人たちも増えるということを私は信じているので、これをまずずっとやっていきたいと思っています。

もう1つは先般の女性の労働農業のグループができました。「さくらひめ」というグループなんですけれども、結構今大学の農学部とかいろいろ聞くと、女性で農業をやりたいという人が増えているそうです。ただし、自分のところが農家ではないので、どうやったらいいのかわからないんですよという声が多いということを知りました。例えば、冗談めかした話かもしれませんが、婚活事業をやっていると、やる気のある農家出身じゃないけど農業をやりたいという女性と、農家の後継者で今ひとつ元気のない男の子とマッチングさせて結婚させて乗っ取っちゃえ、というパターンもあるのかなというようなことまで考えていくと、いろんなチャンスはあるのではないかと思います。

もう1つは耕作放棄地なんですけれども、こんなケースがありました。これは松野町のケースなんですけれども、南予というのは中予地域以上に地理的なハンディを負っています。物流コストは高い、遠い、不便、山の中、松野町になりますと最たるものになるんですね。この地域の農業と雇用を考えるために企業誘致をやったんですよ。そんな場所になかなか企業は来てくれません。特色は何かと言うと、素材の良さになります。素材を新鮮なままでフル活用できるところを魅力として、食品加工の会社に重点を絞った誘致活動を行いました。平成26年から27年にかけて、この不便な地理的ハンディを持っている南予に3つの工場が誘致がなかったんですけども、1つは冷凍コロッケ、それこそイモを使うということで工場建設に向け準備が進んでいます。もう1つはまさに松野町なんですけれども、直接の食べ物ではないんですが柑橘の成分を活用したいということで、化粧品の工場、今これも建設しています。もう1つは宇和島、鬼北エリアなんですけど、ここには高級和菓子メーカー・源吉兆庵の工場が建設されることになって今その準備をしているところなんです。この源吉兆庵が条件を出したのは、自分たちは世界で戦っている、自分たちが求める品質のこれこれこういう農産物を供給していただきたい、その品質基準に合えば値段はしっかりした額を払います、安定的にいただきたい、という条件なんです。これは地域を挙げて松野町・鬼北町・宇和島市が頑張ってくれて、現在、地域おこし協力隊の若い人たちが生産に携わってくれています。この前、ちょっと生産現場を見てきたんですけども、ここは耕作放棄地の瓦礫だらけの山だったんです。これを皆で撤去してきれいに整備して、すばらしい畑にな

って桃がすくすくと育って、自信満々です。源吉兆庵が求めているのにピッタリ、それを上回るものを絶対作って見せますよ、という感じで目を輝かせて説明をしてくれたのが印象的でした。

こうした例もあるし、もう1つはやっぱり農地の流動化がもうちょっと進まないかなと、地域間での貸し借りも含めて、そういう後押しは今やっているんですが、なかなか貸すということに抵抗があって進んでいないんですが、集落でやる場合もあればやる気のある人のところに集約する場合もあれば、そういうふうなことを粘り強く働きかけることによって集約化に関わっていきたいと思っています。

それから、鳥獣被害は非常に悩ましい問題で、これも全国どこに行っても大きな課題になっています。そもそもは愛媛県にはそうイノシシはいなかったんですね。平成13年だったか、大きな台風19号が来て、広島島の島を直撃したときにその島ではイノブタを大量に飼育していたんですね。その柵が壊れてその島で飼っていた大量のイノブタが島から出たんです。瀬戸内海を泳いで、まず最初に着いたのが大島や大三島、伯方島といった愛媛県の今治の島しょ部、それから中予の中島、興居島。平成15年には中島という松山の島にはイノシシが1頭もいなかったんです。今1,000頭超えています。何でこんなに増えるかということ、野生のイノシシと違ってイノブタですから年に2回お産をする。しかも1回あたり野生のイノシシの場合1頭しか生まないんですけど、3頭、4頭も産みますからすさまじいスピードで増えていくという現実があります。それをどうすれば駆除できるかという妙案がないんですね。まず捕ってくれる人が高齢化し、減っている。猟友会で猟銃を使う方ですね。今、これをカバーするために自衛隊にまず頼みに行ったら法律の関係でできないと。警察のOBに免許取ってやってくれと言ったら、全然別ものなんですって言われて、そう簡単でもない。猟友会としても縄張りの問題があったり、免許を取得するときのお金、銃を保管するときの手続きなどいろいろ面倒くさいというようなこともあってなかなか増えない。そんな状況があるんですが、そうは言っても放置できないので、今、1頭当たりの捕獲単価を上げたりしながら、捕獲頭数は年々増えています。でもさっき言ったイノブタの繁殖力がそれを上回っている状況なので、そのへんはこれからの大きな課題だなと思っています。

そんな中で地域によってはこんなことをやっているまち、中部地方だったと思いますが、若い人たちがイノシシの繁殖に苦しむまちでNPO法人を立ち上げました。彼らが何をやっているかと言うと、イノシシの捕獲、イノシシの処理、イノシシの加工、イノシシの加工品の販売、全部をNPO法人で一手に行おうということでチャレンジしています。ここが若者らしいなと思ったんですけど、名前が結構楽しそうで、国の機関で例えば中小企業庁とか、消防庁とか〇〇庁というのがありますが、それをもじって「猪鹿庁」というのをつくっているんです。NPO法人「猪鹿庁」。捕獲部隊は捜査1課、捜査1課長というのが肩書なんですね。若い女の子は加工品のパッケージのデザインをしたり、皆がそれぞれ役割分担して1つの新しいビジネスというぐらいNPO法人のありようというものを世に示した例だと思うんですけど、いろんなやり方があるんだなと思っています。

それに似たことをやっているのが県外からIターンで中島に来た若者たちの「農音」というグループ、彼らもそんなことに今チャレンジしようとしていますので、ぜひそういった例なども参考にしながら皆さんでも地域ごとに取り組みをしていただきたいと思います。

## 6. 面河地区の観光振興等について

石鎚ヒルクライムも5回目を数え、今年も参加募集したが、11分で700名に到達し大変な反響を呼んでいる。今年も知事が出場されることを切にお願いしたい。

昨年、石鎚山が国立公園に指定されて60周年記念でいろいろな催しが開催された。県や町がいろいろなイベントを実施し、私たちが試行錯誤しながら生まれたのが「久万高原町ぐるっと3駅スタンプラリー」というもの。道の駅を3つ回ってスタンプを押し、最後は土小屋の遙拝



殿で御朱印をいただくという企画で、昨年の7月の1日から500個全部を完売した。感想を読むと、「こんなところに神社があったのか」、「すごい景色のいいところだ」など、いろんな発見があったようでやってよかった。また、久万高原町を木材の町としてもアピールしていきたい。面河地区は超高齢化の地域であるが、観光としては流動人口を多くすることが可能であることをヒルクライムやスタンプラリーを通じて感じた。面河溪谷にも猿飛佐助の発祥の地という石碑がある。石鎚スカイラインを上がっていくと猿飛谷というところがあり、猿飛佐助の作者が何かいいネーミングがないかと探していたときに面河へ来られ、猿飛谷を目にして猿飛佐助で行こうと決まったといういわれが伝わっている。それを最近発見したので、これをアピールして観光につなげていきたい。

今年8月11日は山の日であり、自然や山を満喫できるイベントを企画中であるが、県の企画があれば教えてほしい。また、私たちのイベントも後押ししていただきたい。道路の整備、自然の保護等が必要なのでお願いしたい。

### 【知事】

石鎚山ヒルクライム自転車イベントが全国でも響きわたるような有名な大会になったことは本当にうれしく思っています。最初の大会が確か270人の参加、土砂降りの参加は2回目なんですけれども、あっという間に11分というのはいずれですね。全国から来られるようになりました。しまなみはもちろんやっていたんですが、山のステータスのコースとして絶好の場所だということで、最初は地元も何が何だか分からなかったと思うんですけれども、信じて取り組んでいただいたことが人気の大会に成長したことにつながって、本当にうれしく思います。僕はヒルクライムで忘れられないのは、第3回大会で町長さんがやたら走って、何と68歳から自転車始めたんですよ。2年後にその大会に出て僕、負けたんですよ。68歳の町長の後ろ姿を見て、先に行かれた姿が忘れられなくて、ああ、そうじゃなかった。最初は僕が勝ったんだ。翌年町長が僕に、「今年も盛り上げるために出てくれ」と言われたので、あれきつくてね。僕は「嫌です。もう。パスです」って言ったら、「僕も68歳にしてやろうとしているんだけど、今年も体調が悪いんだ」と。「病院に通っていてろくに走ってもないんだけど、老体に鞭打って地域の振興のために出るんやけん、あんたはわしより若いやけん出ないといくまいが」と言われて、「そうですか。病気でもそこまでやるんだったらやりましようわい」と言って、全く練習しないで行ったんですよ。上に上がって地元の人に「町長は体調が悪かったらしいね」と言ったら、「いや、ピンピンとるで。毎日自転車の練習しよったで」と言って、うそに気がつかなくてぶっちぎられて負けたんですよ。去年はリベンジの年だったんで、勝ちました。本当に宿命のライバルみたいになっているんですけど、そうやって68にして始めて、あの過酷なヒルクライムを走れるようになるというのに驚いたんですよ。

本当に自転車というのは人を若返らせていくんだなということも感じました。海外に行くともむしろ若者じゃないんですね。40代、50代、60代の方があの恰好で走っています。何のためかと言うと健康と生きがいと友情のためなんですね。ヒルクライムも今後ますます発展して行くと思いますし、受け入れ態勢もキャパを広げるには多分1,000人にしたら1,000人が優に来ると思うんですよ。そこまで受け入れられるかどうかは問題なので、ぜひ今後とも続いていくことを期待しています。

それから石鎚山というのは何と言ってももっとアピールしていいのは、西日本最高峰ということ。西日本で一番高い山だということももっともっていいと思うし、これも証明はできないんだけど、日本で最も大きな鎖を登れる、そういうところはないんですよ。日本で一番大きいかどうか僕も分からないんだけど、大丈夫だと思いますよ。言ったら勝ちなんです。日本で一番大きな鎖が待っているんですよって言うのが人を惹き付ける要件になるのかなと。その

ために地域からの要望をいただいていたので、2年前にトイレを何とかつくろうということで、環境配慮型のトイレが完成しました。あそこの使用料を盗んで行った不逞の輩がいて、本当に悲しいことなんですけれども、サイクリングとはまた別次元の山登り、これもまたすごいブームになりましたね。愛媛県に住んでいると気がつかないのですが、例えば松山にいて2時間弱で土小屋まで行って、山登りして、距離数にしたら5キロぐらいですかね。2時間ちょっとで登れて帰ってこれるわけですよ。天狗岳とかは別世界じゃないですか。日帰りでこんな経験ができるなんてことは普通ないですね。石鎚のほうから行けば冬はスキーができるわけですよ。ノーマルのタイヤで石鎚神社まで行って、ロープウェイで上がって、午前10時には白銀の世界に立っているわけですよ。スキーをして2時ぐらいまで十分滑れて戻ってきたら、夕方の4時か5時には松山の自宅に帰っているんですよ。こんな環境って日本全国どこへ行ったってないのに、個人的には何で皆活用しないんだろうと思ってます。石鎚が日本最高峰だから人を惹き付けられる。しまなみと同じように人を惹き付けるだけのコンテンツだと思うんですが、実は面河からの土小屋ルートも含めて、東予を車で走っているとずっと四国山脈が繋がっているじゃないですか。あれを1個1個調べてみるとものすごく面白い山登りコースなんですね。例えば新居浜に西明石山というのがあるんです。ここは昔、別子銅山だったところで、住友グループの発祥した場所で、あの山の上に1万5,000人の人が昔住んでいました。今は200人ですよ。ですから1万5,000人時代の名残が残っています。精錬所があったり、5,000人収容の公会堂が山の中にあったり、ばかかかい病院の跡地があったり、それらの昔の写真が全部登山道に掲示されて、かつてここは銅山としていかに栄えていたかというのを楽しみながらトレッキングできます。そういうことを新居浜市の人たちに聞いたら、登ったことがある人はほとんどいないんです。毎日見てるけど登ったことがない、こういうものだなと。

石鎚を起点にして西条、新居浜、四国中央に至るルートを安全に登れる手ごろなトレッキングコースとして結び付ければ面白い素材になるかなと感じているので、そんなことをこれから仕掛けていきたいなと思っています。

それから林業はもう1つ新しい取り組みをやっているのが、CLTという新しい木材の活用の方法なんですけど、今までの集成材というのはスギとかヒノキのひき板を縦に縦に組み合わせるんですね。それが今、日本で認められている集成材です。海外はこれを縦横にクロスさせて集成材をつくっています。そうすると強度が飛躍的に増すんです。実は今年、CLTというのを海外は完全に認めまして、ヨーロッパだと10階建てまでOKです。それぐらいの強度なんです。やっと日本もその方向に動き始めて、これは法律を改正しないといけないので、恐らく最終的に日本の場合は4階建てか5階建てくらいまで認められるようになると思うんですが、今、その試験的な実験が行われております。久万高原のほうでヒノキを使ったCLT工法の実験を2年前からやって、いい結果が出ているようです。もうすぐ法律が改正される、じゃあこれからどうするか、それをつくる場所がほしいと思ったところ、西条市に県の土地があったので、県内の木材製材所のやり手の人がそこを買いますと。そこにCLTの製造工場をつくりますということで、今年決まったんです。この工場のうち本格生産を行っているところは今のところ全国で2か所しかなくて、鹿児島県と岡山県、今度愛媛県で民間の方がつくると全国で3番目の工場ができるんです。そうするとそこに木材をどんどん送れるような可能性が生まれるので、林業活性化の1つの道筋にしたいなと思っています。

それから山の中って思わぬ課題があると思うんですけど、猿飛谷は知らなかったんですけど、面白そうですね。美川の山へ昔落選中1件1件回ったことがあるんですけど、おしゃれな名前を見つけたことがあるんですよ。これはいい名前でした。「とろめき橋」というのがありました。これは忘れられなかったですね。美川の横山の手前のところをちょっと潜っていくと「とろめき橋」というおしゃれな橋の名前が出て来て、そこの奥を渡っていくと当時数件の民家があったんですね。何でそれをよく覚えているかと言うと、真夏に行ったんですよ。見もしないで1件1件

「こんにちは」って歩いて行くだけなんですけど、中に入ったらおばあちゃんの声が聞こえて来て、「なに、誰ぞな」と言って、「中村時広って言います」って言ったら、全身素っ裸で出て来てくださった。80歳くらいのおばあちゃんでしたが、「おばあちゃんやけんよかろうが」と。「そうはいかない」ということで忘れられない光景でした。そういう地域の地名にしてもものにしても、まだまだ知られざることがあるんだなということで、猿飛谷、記憶させていただきます。

## 《後日回答》〔中予地方局〕

ご提言いただいた方に対し、次のとおり回答いたしました。

「8月11日の山の日における、県の取組みについては、「えひめ山の日集い」の併催事業として、松野町「滑床溪谷」において「森林散策」を実施する予定で、7月4日(月)から、参加者募集を開始しているところです。

この他、県や「石鎚山クリーンアップ協議会」（県や久万高原町等が参画し、石鎚山系の環境保全活動を促進）でも、同日、愛媛県山岳連盟との共催で、親子で山を知り、山に親しんでもらうための「石鎚山環境啓発親子登山」を実施する予定です。

なお、面河ふるさと市実行委員会が企画するイベントについては、県中予地方局フェイスブック等を活用した一般県民への告知など、PRの面でご協力させていただきたいので、イベントの内容が決まりましたら情報提供をいただきますようお願い申し上げます。」

## 7. 婦人会の活動について

東温市は平成28年度から市政として、小さくてもきらりと光る、住んでみたい、住んで良かったと思う市を10年後の将来像として取り組んでいる。私たち婦人会も、婦人の教養を高める活動、生活を改善向上していく活動、社会をより良くしていく活動等を行い、住んでみたい、住んで良かったまちづくりにつなげている。女性がいきいきと元気に生活し、地域社会のために活動することは東温市の将来像実現や、魅力あるまちづくりにつながる。また、こうした活動により健康寿命を伸ばすことで医療費削減や介護予防などの財政面にもつながっていくと考えている。私たち婦人会の活動をこれからも応援していただきたい。

### 【知事】

いつもありがとうございます。地域によっては婦人会がなくなっているところもあるんですけど、実はコミュニティということ考えたときには、女性のまとまった力というのは誠に大きなパワーにつながるがあります。今後ともそれぞれの地区でまた新しい次世代の方も会場にいらしていただきますようお願い申し上げたいと思います。

東温市は松山に近い所なんですけど、実は企業がかなりたくさんあったり、面白い文化施設があったり非常に個性的、きらりと光るといってあれですけども、個性的なものが多いなと結構感じます。東温市の企業で福祉機器の最先端をいっている企業があったり、魚の仕分け機、大小の魚をパッパッと仕分けするものを世界に輸出している企業があったり、ゲームのダーツの8割の矢のシェアをもっている会社があったり、面白い会社がいっぱいあるんですよ。それから脱脂綿とかガーゼに使う糸をと巻くときに糸がずれるとうまく巻けないので、これを修正する機械をつくっている会社があって、これは日本国内の100%近いシェアを持っている、そんな会社があります。まさに中小企業なんだけれどもさっきの「スゴ技」ではないですけども、世界で戦っている会社が人口あれだけの東温市にあるということで驚かされたこともございました。もう1つ東温市で忘れられないのは坊ちゃん劇場の存在で、これは自分も責任を感じているところなんです。今から12年前だったかな、秋田県にわらび座という劇団がありまして、そのわらび座という劇団が松山で公演をしたいということになったんですよ。これはただ単に頼まれただけで、僕

はどちらかという運動部系だったのでミュージカルは全然知りませんでした。ともかく力を貸してくれと言われて、執行委員長になっちゃったんですよ。演目は「燕」という題だったんですが、徳川時代の朝鮮通信使の物語だったんですが、何のために来たのかというと、スポンサーを探してきてくれということだったんです。その中の1つにある会社があって、社長こういうのを引き受けたのでちょっと力を貸してくださいよと言ったら、その会社の社長はミュージカルなんか苦手だと言ったんですが、渋々スポンサーになってくれたんです。当日その「燕」を見にいきました。隣同士で見てたんです。幕が開く直前までこの社長さんは「市長、こんなんは苦手よ」と言っていたんです。幕が上がったら面白過ぎて、僕が隣にいることを気にもしないで没頭して見てたんですよ。終わりました、でパッと見たらぼろぼろ泣いてるんですよ。「社長どうしたんですか」と、「わしは目覚めた」と。「年も年やけん後人生残り少ないけど、残った人生でやるべきことを見つけた。文化事業だ」と言って、坊ちゃん劇場をつくったんですよ。そういういきさつがあるのでなんとか応援したいなとずっと思って10年たちました。今坊ちゃん劇場は年間8万7,000人くらいのお客さんが来ています。あと1万3,000人、10万人いたら存続できると思うんですが、8万7,000人だといずれ止める可能性もあるんです。東温市にとっては財産ですから、もっともっとその価値を皆さんで共有していただきたいと思いますし、僕らも側面でサポートしていきます。一民間企業を応援するということがなくて、東温市にある人を集客できるコンテンツ、年間270公演を地方でやる劇場なんてまずないです。その価値をぜひ知ってもらいたいと思います。特に最初の1作目は坊ちゃんなので、2作目何をしようかと、特に愛媛や四国にゆかりのあるものをやりたいということで、2作目は実は僕がお願いして、「伊予の国八百八狸物語」、3作目が「竜馬」、4作目があって、その次のときに僕からお願いしたんですよ。当時坂の上の雲のまちづくりをやっていたのですが、松山市の堀之内公園を整備するとき一枚の金貨が出てきて、最初何だろうと担当職員が磨いたら、名前が刻まれていました。100年前のロシア金貨ですね。名前を見たらニコライというロシア人の名前ともう1つカタカナで日本人の名前が刻まれていました。これがタチバナチカラという名前だったので、僕、記者会見しまして、堀之内公園から一枚金貨が発見されたので皆さんにご紹介します。あそこはロシア人の捕虜所があったところなので、きっとこれはその中で戦争交戦中だったにも関わらず、おもてなしをする中で芽生えた男同士の友情が刻まれた金貨です、という発表をしたんですね。発表してから2週間くらいたって担当部署から、「市長大変なことをしてしまいました」、「どうしたの」といったら、あれタチバナチカラでない、タケバナカさんという女性でしたと。調べてみたら、当時のあそこにあったロシア人将兵を看護する日赤の看護師さんだったんですね。当然許されざる関係があるんですよ。タケバナカと何で分かったかということ、100年前の新聞に写真入りで記事が載っていたんです。で解雇されたんですよ。この金貨はこれ以上詮索しません。想像するに、惹かれ合ったけれども許されない関係になったので引き裂かれた、その最後の別れの日で2人で刻んだ金貨だったんじゃないかということで終えたんですね。そのままでは世に出さないと価値がないので考えてくれと言ったら、やりましようと言って生まれたのが「誓いのコイン」という演目なんです。見られた方います？あぁ、もったいないな、泣きますよね。もう僕ボロボロに泣きましたよ。あの本当にあのコンテンツの素晴らしさというのは、僕みたいにミュージカルが苦手な人間がはまっちゃっていますから。本当のもっともっと多くの人に見てもらいたいと思いますし、東温市はぜひ大事にしてあげていただきたい、そのためにも婦人部の皆さん頑張ってくださいと思います。

## 8. 東温市でのボランティア活動について

愛媛県ボランティア連絡協議会は今年3月で解散となり、非常に残念に思う。2、3年後どうしても必要とあらばと言われたが、会長たちはなかなか難しいと言っていた。県ボランティア協議会はなくなったが、災害が起きたときに助け合おうと平成22年に広域松山圏ボランティア協会を発足させた。これは中予地区6市町の社協職員、ボランティア同士が仲間づくりをしようと年1回持ち回りで講習会をしている。先日6月19日、ここ砥部町で第7回、179名が集まり、楽しい1日を笑顔いっぱい終了した。どこも高齢化が進み、ボランティア人数も減少となり、また、団塊世代の方々に声をかけても男性はボランティアに関心がない。退職し、地域に戻り、周りを助けてくださるよう知事からも声をかけていただけるとありがたい。東温市では平成23年に「海渡る車椅子実行委員会」が発足し、病院、施設、各家庭から不用となった車椅子を整備し、カンボジアに送っている。現在7回で125台になったが、これからも続けていきたい。

### 【知事】

解散のことについてお叱りを受けるかもしれませんが、今、知ったんですよ。ええっと思ってお聞きしたんですが、ボランティアというのはこれからすごく重要になってくるのはなぜかと言うと、この国自体がもうこのままの体制では持たなくなるだろうということが見えているんですね。冒頭にお話した少子高齢化というのが日本の社会に何をもたらすか。大きな変化は2つあって、1つは人口が減りますから市場が小さくなるんですね。ということは農業もものづくりも含めて、国内だけだとどんどんマーケットは売り先が小さくなっていくという現象が起こるとするのは、まず第一の大きな変化だと思います。そのためには、海外も含めてカバーするところを見つけていかないといけないという時代に入っていくというのが1つです。もう1つは社会保障制度が瓦解する。今の日本の社会制度は福祉サービスを必要とするお年寄りの人数が少なく、稼げる若い人の人数が多いという、人口で言うとピラミッド型の時代につくられた制度なので、それを前提に組み立てられているんですね。この状態が続けば問題なかったんですが、少子高齢化になってくるとピラミッドからドラム型になって、最後は若い人が少なくて福祉サービスを必要とするお年寄りが増えて逆ピラミッドになるんです。今、この段階に入っちゃってるんですよ。だから制度が持つわけがない。具体的にどんなことが起こるかということ計算した人がいまして、今働いている人がサラリーマン、会社勤めや公務員は働いて給料をもらいます。そのときに明細を見ると天引きされるんですね。保険料とか年金の負担料とかいろいろ入りますが、所得税も引いている。この天引きされている金額が100の給料の支給のうち今38~40なんです。給料が振り込まれました、明細見て支給される現金というのは100の名目だったら60ぐらいしかないわけですが、先に天引きされていますから。今はこの状態なんですけれども、これから先、人口構造がどんどん変わっていくと仮定した場合、負担する若い人が減ります。福祉サービスを必要とする人は増えます。当然のことながら成り立たなくなるはずなんです。全く福祉サービスを変えないという仮定において20年時空を進めた場合、全く変えませんが、じゃあ20年後の若い人はどれぐらい負担をしないと今の制度が維持できないかと言うと、計算した人がいます。70まで上げないと無理です。ということは、給料が振り込まれたときに70が差引かれて手元にくるのは30しないと今の制度すら維持できないというのが実は一番恐ろしい話だと思ってます。本当はこれは国会でやらないといけないんですけど、皆逃げているんですね。なぜならばこれを解消する方法は3つしかなくて、1つは消費税も含めて徹底的に負担を上げる、税金をどんどん上げます。その代り福祉サービスは維持しましょうという選択肢を選ぶのか。そんな負担は無理だ、だったらサービスを減らすしかないでしょうということでバサバサ切るかなんです。どっちも嫌だとなったら、第三の道しかない。第三の道は実は地域のコミュニティとかボランティアとか

NPOとか、支え合うという仕組みと行政がタイアップして乗り切るしかない。それが第三の道だと思ってきたので、その一角を担うのがボランティアなんですね。ですから、とても大事な動きにこれからますますなってくるんだけど、その中で解散というのはちょっと残念だなというのが正直な感想です。

ただ一方で、発展的解消という可能性が残されているなと思ったのは、今の中予の話なんですけど、平成12年のときに当時松山市長に就任したばかりだったんですが、愛媛観光協会というのがあったんです。愛媛県全体、全市町が参加している観光の団体だったんです。実は僕はその会に出た瞬間にこれは意味がないということで、松山市として脱会しますということで脱会したんですよ。それはご破算になっちゃったんですよ。なぜ脱会したかと言うと、ただ単に集まってお金出して、皆の持ち寄りの情報をパンフレットにして、年2回発行しているだけなんですよ。一体この会に何の意味があるのかということでものすごく嫌いました。意味のないことはできないと。ただ単に機関誌を発行するだけを目的とする観光協会だったら、松山市としては意味がないから脱会しますと言って脱会したんです。その後すぐに発展的解消になって、まずは中予で実のある観光連携をやろうということで、東温市と砥部町と松前町の当時の市長さん、町長さんに声をかけて、中予だけでやりませんかという話をしたら、皆さん乗ってきてくれて、皆で新しい広域観光連携を模索しようというようなことになったんですね。これは今も続いていると思うんですけども、そこは実はそこに持つていくためには1回上のほうを解散せざるを得なかったというのがありました。むしろ終わった後にそちらのほう機能が機能しているので、そこがまたいろんな地域で生まれてきて、新たなブリッジがかかったのか、ひょっとしたらいいものが生まれる可能性があるのかもしれないので、県が解散したということだけに目を奪われることなく、むしろ発展解消の可能性はあるんじゃないか。今中予でされていると聞いたので、当時のことと似ているなと思いましたので、そっちのほうに目を向けて未来志向に持つて行ったら面白い動きが出てくるんじゃないかと感じたので、ぜひ検討いただけたらと思います。

カンボジアに車椅子、これも素晴らしい活動だと思うんですが、実はこれも松山市長時代なんですけれども、NPOの方がアフリカのモザンビークに自転車を送りたいと言ってきたんですよ。どういうことって聞いたら、松山市には当時放置自転車がたくさんあったので、どうしているのかというから、実は困っていると言ったら、提供してほしいと。それを提供していただいたら修理から輸送まで全部自分たちでやりますと言って、どこに持つていくのかと聞いたらアフリカのモザンビークだと。かつ行動が面白かったのは自転車の販売店協会が協力してくれて、松山市が持つていた放置自転車、年間200台近くを渡したんです。そして自転車の販売組合が修理を全部ボランティアで引き受けて、今度はNPO法人が企業からいろんなお金を集めてそれをアフリカに輸送しました。タダでは渡さないんです。当時モザンビークは内戦から明け暮れたばかりで銃器が子どもたちを含めて国民の間に大々的に行き渡っていたんですね。自転車を欲しい人が銃と交換ですよ。銃をとにかく回収するためにその事業は使われたんです。それと銃をただ廃棄するだけでなく平和のモニュメントにしようということで、回収した銃を使った芸術作品をいっぱいつくったんです。いろんな面白い取り組みがあったので、そのことをふと思い出したんですけれども、カンボジアは今、愛媛県出身の方が地雷処理に行かれたりいろんなことをされているので、連携されたら思わぬプラスの何かが生まれるんじゃないかなと思います。

## 9. 民生委員の補助員について

昨日、民生児童委員協議会の会長会を開催し情報交換したが、民生委員はとにかく地域を支えるということで皆さん頑張っている。現在の一般企業では定年延長で65歳、あるいは官庁関係でも再雇用となり、民生委員になっていただく方がなかなか選べないという状況である。民生委員は75歳が定年であるが、私たちの地区は定年延長を設けていない。全国23万6,000人

余りの民生委員がいて、必要人数のうち 6,000 人が欠員というデータも出ており、社会変化の中で民生委員への期待が高まる一方、民生委員から負担が大きいという声も出てきている。そういった中、民生委員を補助する協力員といった方、自治体の財政状況によってはできないところもあると思うが、民生委員の補助員の補充を検討していただきたい。

### (中予地方局健康福祉環境部長)

民生委員の状況についてお話をさせていただきます。民生委員につきましては、ただ今の委員さんは平成 25 年 12 月 1 日の改選で任期が 3 年でございますので、今年の 28 年 12 月 1 日が次回の改選となっております。民生委員は管内それぞれの法定数が決められていまして、平成 25 年の時点で東温市であれば民生委員さん 62 名、主任児童委員さん 4 名となっております。県のほうも補助単価引き上げを今回平成 28 年度にいたしまして、民生委員さんに対する補助単価としましては、平成 26 年度までは 4 万 6,720 円、平成 27 年度は 5 万 2,380 円でしたが、平成 28 年度からは 5 万 8,200 円に上げました。全国で 5 番目位置付けとなっております。

先ほど申されました補助員さんにつきましては私のほうでは存じ上げませんので、そういうときが来ましたらまた具体的に教えていただけたらと思います。よろしくをお願いします。

### 【知事】

僕も補助の状況、全国的なレベルや国の考え方も今の段階では分からないので、無責任なことはお答えできないんですけども、確かに大変なことは大変なので、そういったことを今後見極めながら考えていきたいと思えます。今、実現できるか約束はできないんですけども、そういった状況があるということは頭の中に入れておきたいと思えます。ただ、これは民生委員だけの問題ではなくて、要は消防団もそうで、なり手がいなくなってきたんですよ、同じですね。消防団も定年延長したり、ひどかったのは松山市の味酒校区があるんです。松山市の中心部でマンションがバンバン建っていて人口が増えているんですよ。ところが人口が多分 2 万人くらいその校区にいるんですが、消防団は何人いると思えますか。2 万人の校区の中に、12 名です。誰も手を挙げてくれない。しょうがないので新たな手法を当時編み出しまして機能別消防団という考え方を全国で初めて投入したんですよ。機能、1 つは郵便局。郵便局の職員さんはずっと回ってますから機能限定。大規模災害が起こったときのサポート役として消防団員に登録する。もう 1 つは味酒地区は学生が多いんです、学生消防団。これも通常登録して訓練してもらっただけで、彼らは大規模災害が起こったときに避難所の設営や外国人対応に特化してってもらっただけで、彼らは大規模災害が起こったときに避難所の設営や外国人対応に特化してってもらっています。最後が具体的な対策があったんですが、企業内消防団。企業によっては営業を抱えているところは社員が出てしまうんですけども、例えば車のディーラーさんとかスーパーマーケットとか、こういうところは勤務時間内は常時社内にいるわけですね。だからその方々が勤務時間内に火事が起こったとき動してくれる消防団になってくれということで 5 社ぐらい話がついて、それで何とかカバーしているというような苦肉の策を編み出したことがあるんです。ボランティアと言ってもいいと思えます、そういう方々のなり手がなくなっているというのは本当に大きな社会問題になってきていますので、だからこそさっき申し上げた地域のコミュニティ、ボランティア、そして NPO の活動が大事になって来ているということは間違いないなと感じています。

そんな中で、なるほどこういうやり方があるんだなと、小さいところだからできたと思うんですけども、松山市は当時北条市と中島町と合併したんですね。ほとんど松山市のルールに合わせてもらいました。ただ 1 個だけ合わせる必要がないと判断したのがあります。それは中島に続いている総代会制度です。中島には地区地区に総代というのがいるんですよ。この総代さんが全て、社会的な公の仕事を一手に引き受けます。相談係からいろんなその地区ごとのまとめ役を担うわけです。ただし任期は 2 年と決まっています。再任は許されない。交代して逃げるのが

できないような仕組みになっています。必ず2年後には次は誰が総代かが決まっているんです。それを小島町は町政の歴史が始まってからずっと続けています。今でもその総代制があればこそ、他の地域で起こっているような問題が起こってないエリアなんです。地域ごとにそういうコミュニティができれば今言ったような仕組みができることを示してくれたのが小島の事例なのかなと思います。今でもそこは大事にしているので、総代会の忘年会だけは今でも毎回出席させていただいております。ただ2年で全員代わっちゃいますから。

#### 《補足説明》〔保健福祉部〕

民生委員については、今年度が一斉改選期となっており、各市町において選任を行っていただくところ、人口減少や高齢化等に加えて社会情勢の変化による活動の難しさ、災害対応や生活困窮者対応等による負担増などにより委員の確保が以前にも増して難しくなっていると認識しております。

ご提案いただきました民生委員の活動を補助する仕組みとしては、高知県や広島市に協力員の制度があり、民生委員活動をボランティアで補助しているとのこと。今後、他自治体における事例も参考にしながら、本県における地域福祉活動の仕組みについて検討するとともに、日本全体における課題として国に対しても機会を捉えて問題提起したいと考えております。

### 10. 青年農業者全国大会への支援について

愛媛県の青年農業者は、中国四国で会長会議があったときに上がり、他県からびっくりされるぐらい予算的に恵まれていて、いい環境で活動させてもらっていると思った。全国の青年農業者に関して、全国大会が毎年2回、東京で1回、各県持ち回りで1回の計2回やっているが、来年度愛媛県で全国大会がある。国体で忙しいときであるが、会場は松山市を中心に手配することになり、会場をおさえる際に便宜を図っていただきたい。県と松山市との関係とかあると思うが市長をされた方としてぜひお願いしたい。

#### 【知事】

全国大会の場合は人数・規模によって制度が違うんですけども、両方活用したらいいと思うんですよ。県のほうは相談に乗りますので遠慮なしに来ていただいたらいいのと、これも松山市長時代につくった制度が全国規模で何人以上の会、県の施設、市の施設でまた違うんですけども、クラス分けで県の2分の1の助成金を出しますという制度があります。まず県もありますので、県と両方活用したらいいと思いますので、申請のときにどちらかに聞いてみてください。ささやかですが資金面での応援というのもありますので、楽しくしてほしいなと思います。

### 11. 広田地区のPRへの支援について

来年度、広田地区に3校ある小学校が1つに統合されるが、県内唯一の山村留学センターも存続され、広田地域・砥部地域としても盛り上げていきたいと思っているので、県のほうでもPRに力を貸していただきたい。

#### 【知事】

今3校が1校に集約して何人の生徒になるんですか。

#### （参加者）

今年山村留学センターに来られている人が多いんですが、一番多いのが高市、3カ所でも30名はいかないです。

#### 【知事】

町長さん、どうですか。



**【砥部町長】**

山村留学センターを除けば27名。

**【知事】**

27名。

**【砥部町長】**

今年は16名来ていました。

**【知事】**

そんなにいるんですか。1校に学校が集約されるにはいろんな意見があったと思うんですね。これもさっきの中島の例なんですけど、中島に4つの小学校があって町村合併したときに議論しました。そのときに地域のそれぞれの人たちは自分たちの集落から子どもがいなくなったら合併には反対であるという声もあったんですけども、いろんな議論をして最後はどうなったかと言うと、ここで1つ子どもたちの立場に立ちましょうよと。皆さんの地域からそういう灯が消えるというの分かるけれども、子どもたちの視点に立てば同級生が少ないということがいいことなのか、これも大事な視点ではないでしょうか。島が1つに集約すると同級生がものすごく増えるんですよ。1校のところには同級生がいなかったんですよ。その子が大人になったときに同じ思い出を語る友達がいないってことはどうなのかなと。むしろ小さいながらも島の中で同級生がたくさんいたほうが将来の財産になるんじゃないかという視点で議論をしましょうというように言ったときに、いろんな意見があったんですが、最終的にはやっぱり子どもたちを主役に考えよう。その代わり通学の便宜であるとか校舎の構えであるとかいろんなことをやりましょうということで、今は小学校も中学校も同じ場所になっています。とてもいい環境が生まれたという例もあるので、ぜひ集約したことによってプラス効果を出すような知恵を地域で絞っていただきたいなと思います。